

2020年度



第4回

NUFS & NUAS

読書コメント大賞

受賞作品

第4回NUFS&NUAS読書コメント大賞 に寄せて

名古屋外国語大学長・出版会長 亀山郁夫

第4回読書NUFS&NUASコメント大賞の各部門の授賞がすべて決定し、選考委員の一人としてほっとしているところです。今年は少し方式を変え、文字数も増やしました。各応募作品とも、かつてなく自由闊達さが目立ち、たいへん心強く思った次第です。

とりわけ大賞を受賞されたばぶさんの『午後の恐竜』(星新一著)のコメントは、選考委員が舌を巻くほどの達者な書きぶりで、大きな才能を感じさせました。また、最優秀賞のおもちさん『博士の愛した数式』(小川洋子著)のコメントは、みずからのパーソナル的な感覚に寄りそう形でこの作品の魅力を伝えていました。さらに、図書館特別賞のにんべんさんの『アデル人喰い鬼の庭で』(レイラ・スリマニ著)、出版会賞のShun Mさん『空が青いから白を選んだのです：奈良少年刑務所詩集』(寮美千子編)が印象に残りました。

奨励賞の皆さんにも、受賞おめでとうをいいます。また、惜しくも入賞を逃された方々のコメントにも受賞作と甲乙つけがたい優れたものがあつたことを述べておきます。とりわけ、私の若い時代の思い出の書でもある『限りなく透明に近いブルー』(村上龍著)のコメントは、ひととき感慨深いものでありました。

総じて、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学の学生のみなさんの筆力と読書に対する考え方の多様性と可能性を知ることができて、選考委員である私にとってたいへんよい経験となりました。みなさん、どうか、これからも、良い本との出会いを通して、さらなる知的精神的成熟を遂げていってください。

コロナ禍時代の読書、隔離先に持ち込む本

——第4回NUFS & NUAS読書コメント大賞 に寄せて

名古屋外大・学芸大図書館長 藤井省三

最近、中国語圏のある大学人文系学部から、五年に一度の外部評価委員の依頼を受けました。仕事の内容は、二日間に渡り教授陣や学生さんたちと面談、同学部の研究・教育環境を視察して評価報告書を提出することです。その際には旅費と合計17日間の宿泊費、手当てが提供されるとのこと、なぜ二日の仕事に17日の宿泊かと言えば、新型コロナ予防のための隔離期間14日を含むためなのです。

これを私が辞退したのは、オンライン授業やら会議の準備に忙殺されて、長期出張は難しいためなのですが、そもそもお酒も料理も美味しいあの街で、友人たちとも会えずに二週間ホテルで缶詰とは、気が重いことではないですか。

これまで私の周囲では新型コロナ感染者は出ておらず、毎日を楽天的に過ごしてきた私も、この一件がきっかけで、もしも二週間隔離されたらどうしよう？と考えました。オンライン授業等で眼精疲労も甚だしい今日この頃、テレビやDVDはなかなか見る気になれず、やはり眼に易しく心に響き、頭を冷やすものとして読書に勝るものはなし……

そこで無人島に持っていく本、ではありませんが、隔離先に持ち込む本を一〇冊ほどを選ぶのも面白い、と思いついたのです。書斎の本棚を見渡して、あれこれ考えるに——『老子』『荘子』か新約聖書か？魯迅・莫言か漱石・マルケスカ？張愛玲「傾城の恋」か『ノルウェイの森』か？新刊書なら土日の新聞書評欄を開いてみよう、そして読書コメント大賞入賞者の一覧も選書の参考になるだろう——

ところで持ち込んだ本を読み終えてしまったらどうしよう？外大・学芸大図書館OPACで追加の書を探すとして、郵送貸出サービスは隔離先にも適用されるのかしら……と空想する内に、やはり隔離などに至らぬよう、手洗い・うがい・マスク着用に励みたいと改めて思った次第です。



『午後の恐竜』

星新一 著

27ページで深い深い絶望と哀しみに突き落としておいて、たった11ページでにやりと、不敵に私たちを救い出す。なんて残酷で鮮やかな蜃気楼なのか！表題作「午後の恐竜」は収録作の中で最も鮮やかで切れ味の良い物語といえるだろう。人が心に抱える漠然とした死に対する根源的な不安を、厳しくも温かい一振りでなぎ払うような…読み終わって思わずひとり、ああ、と呟きがこぼれる。

この本は一冊を通して、まるで行き先のわからない宇宙旅行をしているようだ。ショートショートでありながら一つ一つの世界観はまるでブラックホールのように際限なく私たちを誘惑する。

ページをめくったその先は、果たして地獄か楽園か。その答えは、読まなければ辿り着けない。

さあ、どうする？

(ばぶ)



『博士の愛した数式』

小川洋子著

数学に触れるとき、私たちは神様の手帳を覗き見しているのかもしれない。80分しか記憶が持たない博士と家政婦は、何度も「初めまして」をする。80分ごとに初対面になる彼らを繋ぐものはたったひとつ、数字である。素数、ルート、 \times 、友愛数。学校で聞けばすり抜けていくような単語のひとつひとつが、博士の言葉になって私の中に沈んでいく。数学の静謐さ、繊細さ、そして美しさ。数学に興味のない私たちは、それらすべてをこの本で初めて知ることになる。ただ理路整然と並ぶ数列が、これほどまでに美しい。私の誕生日は113。2以外のすべての素数は $4n+1$ あるいは $4n-1$ に分類される。 $113=4 \times 28 + 1$ 。そして前者の素数は常に2つの二乗の和で表せる。 $113=8$ の二乗 $+7$ の二乗。美しい素数である。

(おもち)



『アデル人喰い鬼の庭で』

レイラ・スリマニ著

「女性はこうあるべきだ。」女として生まれて22年、何度このセリフを聞かされたことか。それに加えて現代の女性ならば、潔白で上品で母性があるだけではなく自立もしなければならぬいようだ。

この物語の主人公アデルはそんな現代女性の「理想」を全て手に入れたような女性である。パリに住み、医者 of 夫を持ち、息子と仕事に恵まれた美しい女性。しかし実は彼女にとってその生活は、誰にも言えないある秘密を隠すための嘘で溢れていたのだった…。

この本の著者レイラ・スリマニはモロッコ生まれ、フランスで活躍する作家兼ジャーナリスト。フェミニズム思想の影響を受けた彼女は、ペンを通して女性の開放を社会に訴え続けている。この物語はそんな彼女のメッセージの一つだ。

アデルの秘密が次第に明らかになり、嘘で塗り固められた彼女の生活が崩れた時、あなたはきつとこう問うだろう。女性はありのままではダメなのか、と。

(にんべん)



出版会賞

『空が青いから白をえらんだのです』

：奈良少年刑務所詩集』

寮 美千子編

奈良少年刑務所で更生を目的とするプログラムの一環として取り組まれた詩の授業。それぞれ少年達が自分の正直な気持ちを詩に綴り、それを本人が朗読し互いに感想を述べあうことで彼らの閉ざされた心が開いていく。本のタイトルにある「空が青いから白を選んだのです」。この僅か一行の「くも」という題の詩は普段は無口なAくんが書いたもの。身体が弱く、父にいつも暴力を振るわれ、6年前に亡くなったAくんの母の最期の言葉は「つらいことがあった、空を見て。そこにわたしがいるから」だった。朗読後、彼は自分が幼いころに母を守れなかった後悔を教室にいる仲間へ語った。それを聞いた仲間の一人が「Aくんのおかあさんは、まっ白でふわふわなんやと思いました」と言った。私は犯罪を犯したとは思えない彼らの繊細で純粋な言葉や気持ちに涙が溢れた。もし彼らに寄り添う人や言葉があったら。私達には子供達が愛されながら育つ社会を作る責任と義務がある。

(Shun M)



奨励賞

『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』

新井紀子著

塾講師をしている私が、今一番実感している問題が「子供たちの読解力の低下」だ。子供たちは問題を見るとすぐ「わからない」と言う。問題文は口に出して読めるので文字は読めている、解くのが難しい問題でもない。ではなぜ。実は、問題の解き方が「わからない」のではなく、問題の意味が「わからない」のだ。今の子供たちは、読解力がないまま問題を解いている。私はこの状況にどう教えたらよいかも分からず悩んでいた。そんな時にこの本に出会った。よく耳にするAIとは何か、そしてAIができることが増える中、人間が今後AIに代替されないよう立ち向かうには、「読解力」が鍵になることを知った。私のように子供たちの読解力を心配することは、この国の未来を考えることだと思う。教育に興味がある人もない人も、必ず訪れる日本の将来をこの本を通じてより身近に感じ、そして真剣に考える機会にしてほしい。あなたが思うより、この国の未来は明るくない。

(フィッシュ)

『「カッコいい」とは何か』

平野啓一郎著

僕は人生に迫りくるあらゆる選択肢を常にかっこいいと思う方へと進んできた。なぜかはわからないが、幼い頃からかっこいいものに憧れていた。そして、この本に出会ったことでかっこいいということがどういうことなのか考えたこともなかったことに気がついた。どうやら感覚で選んでいたようだ。

しかし、かっこいいという言葉にはその汎用性以上に意味の深さを感じる。人々が簡単に使うかっこいい。でもその人の経験や美学によってはカッコ悪く思うのかもしれない。カッコ悪いことがかっこいいこともある。それもかっこいいとしか言い表せない。

詰まる所、かっこいいとは人それぞれで生理的興奮による痺れを感じるかどうかであるのだが、もはやそんなことはどうでも良い。少なくともこの本を手に取り、コメントを書いている自分はめちゃくちゃかっこいい。

というのがかっこいいのだと僕は思う。

(いっしー)



奨励賞

『逆ソクラテス』

伊坂幸太郎著

あなたは「常識」を疑ったことがあるだろうか。

私は今年就職活動を経験したが、どうしてこんなルールに？と疑問を抱く点が多量にあった。履歴書の性別欄には男女どちらかしかなく、顔写真と印鑑が必須。寒くてもストッキングは肌色でなければならず、エスカレーターで前に立つ女子の足には靴擦れの血がにじんでいる。

固定観念とは呪いだ。そして、大人になるほど呪いは無意識に私たちになじんでいく。

逆ソクラテスには日常に蔓延るあらゆる呪いに立ち向かう姿が子供を主軸にして書かれている。大学を卒業したら今よりもっとたくさんの固定概念にがんじがらめにされるのだろう。そんな時、この作品の「僕は、そうは、思わない。」という言葉が読んだ人に力を与えてくれる。それは、おかしいことをおかしいといえる、私たちがこうなりたいと思っていた大人への一歩につながるはずだ。

(鯨井陸)



奨励賞

『さきちゃんたちの夜』

よしもとばなな著

「もっとふわふわ生きてもいいのかもな。」

ふとそう思った。

「幸せでいることが正解」

「完璧な人生を歩んでいることが正解」

そんな価値観の中で生きてきた私にとって、これは大きな発見だった。

物語の主人公であるたくさんの「さき」たち。それぞれが大切な人の死だったり、人間のいやな生々しさだったり、物語だと分かりながらも思わず目を背けたくくなるような現実を抱えていた。

でも彼女たちはそこから逃げることなく、正面から見つめてしっかりと受け止めていた。

そして軽く受け流していた。

現実から目を背けてはいけないけれど、全部を背負ってでは生きづらい。

本当は日々の何気ないところに幸せはあふれているんだよ。難しいのは、そのことに気付くことができるかどうか。

そんなことを言われている気がした。

どんな時にも本当は幸せであふれていて、それに気付けるかどうかは、その時の心の余裕と、ちょっとの鈍感さにかかっているのかもしれない。

(B)



奨励賞

『茶の本』

岡倉覚三著

留学を目前にして、言語を学ぶことだけで十分だろうか、と不安を感じた。本当に必要なのは、自らの国「日本」について深く知ることではないか、と。そんなとき、ふと手に取った一冊。かつての日本人の美しい生き方を、「茶の湯」の世界から鮮明に描き出す。茶人は、日常の些事をこよなく愛し、非常に大切にする。自らを誇張せず、他者と比べることなく、あるがままに生きる。

戦前に出版された本書には、文明化した社会を「善」、独自の文化を持った社会を「野蛮」とみなした当時の西洋社会へ調和と共存を訴えかける著者のメッセージが込められている。現代のグローバル化した競争社会で、忘れられかけているの日本の精神を思い出し、世界に発信していくことが与える影響は計り知れない。

(夕オ)



奨励賞

『ドグラ・マグラ』

夢野久作著

「ドグラ・マグラ」を一言で形容するならば、「高熱で寝込んだ時に見る悪夢」という表現が最も的確なのではないだろうか。踊る胎児の巻頭歌から始まり、ブーン…ブウーン…という羽音、謎の部屋で目覚めた記憶喪失の「私」、チャカポコと間の抜けた地獄の描写と、極めつけは手に取る事をかなり躊躇するようなこの表紙。どれをとっても不可解そのもので、作者の悪意が滲み出ているとしか思えない。私は本書を読む中で幾度となく挫折し、その不条理さと難解さに頭を抱えた。さすが「日本三大奇書」に数えられるだけあって、読み進めているこちらの頭もどうにかなりそうになる。果たしてこの世の中に、これほどまで狂気に満ち溢れた物語を400字以内で要約し、紹介できるような猛者はいるのだろうか。

もしこの作品を、心の底から「面白い！」と感じられるような人がいたら私はその人にこう言いたい。

おめでとう、あなたは悪夢に魅入られた。

(青鯖太郎)



奨励賞

『持たざる者』

金原ひとみ著

2011年3月11日、地面が揺れ、私はその時何を感じた。東北に住む人は、関東に住む人は、海外に住む人は何を感じただろうか。この物語は震災から3年後、一章に一人ずつ、四章で四人の登場人物が主役となって語る生活の物語だ。9年前の東日本大震災は多くの物を壊し、奪ってしまった。この物語の主な登場人物は東京や海外に住んでいたため、震災による大きな被害には遭わなかったが、皆、間接的に震災によって奪われたものがある。そして彼らの生活は大きく変化した。当時のニュースを見ていた私は、崩れた街並みが震災の被害で、小中学校の体育館の仕切られたスペースが被害者の生活であると思っていた。しかし震災の被害はもっと多様で複雑であった。だが、大切なものを奪われても生きている限り私達の生活は続く。この物語の四人も、私達も皆『持たざる者』だ。しかし、持たざることに悲観せず、生活を続けていかなければならない、生きている限り。

(プミコ)



奨励賞

『流浪の月』

凧良ゆう著

家族、友達、恋人、親友…人はとかく関係性に名前をつけたがる。しかし、それは本当に意味のある行為だろうか。そこからはみ出る関係性は認められないのだろうか。

誘拐犯とその被害者。自分を誘拐した犯人と一緒に居たいと言えば、周囲は洗脳されている、と聞く耳を持たない。男と女であれば恋なのか、性的関係なのか、何かに当てはめなければ気が済まない。世間が彼に貼ったレッテルと、彼女が共に時を過ごした彼はあまりにも違う。わかったような口調で大変だったねと慰める人はいても、彼に救われたという彼女の本当の心に目を向ける人はいなかった。人々の常識は、思い込みは、彼女を救うことはできない。社会の善意は逆に彼女を苦しめる。

事件の真実、2人の本心を知った私は、ただ側に居さえすればいい、という彼らの新しい関係性への旅立ちを心の底から祝福できる。

(りー)